



プレスリリース



古伊万里唐草 -暮らしのうつわ- 展

2016年7月2日(土)~9月22日(木・祝)



広報用写真

※表紙掲載の展示予定作品の写真データ等をご用意してあります。ご掲載の際は注意事項をご覧の上、別紙写真借用申請書をお送り下さい。



①色絵 花卉文 変形皿

伊万里（古九谷様式）

江戸時代（17世紀中期）口径 16.1 cm

10弁の花形にかたどった変形皿。口縁に縁錆を施す。見込は赤の円内に鮮やかな色絵で岩と植物を描き、周囲は黄色の唐草文がめぐる。裏面は三方に赤い松葉を配し、高台内は染付圈線内に赤で「福」銘を記す。複雑な器形ながら型打ちによって端正につくられた作品である。



②染付 花唐草文 藤花形皿

伊万里

江戸時代（17世紀後半）口径 29.7×15.2 cm
型打ち成形により藤の花房をかたどった皿。白磁に花弁を陽刻であらわし、染付で花唐草を丹念に描く。口縁には錆を塗り、全体の印象を引き締めている。裏面も花唐草、器形に合わせた付け高台の側面には櫛目文がめぐる。伊万里焼に藤花は度々みられるが、中でもモダンな意匠の優品である。



③染付 蝶唐草文 手焙

伊万里

江戸時代（18世紀前半）高 20.8 cm

全体を蝶唐草で装飾した手焙（てあぶり）。木瓜型に開けた窓から、炭を入れて用いる暖房具である。アーチ状の把手により、持ち運びのしやすい機能性を備えた作りとしている。丸いドーム型の胴部や裾の広がった高めの高台など、造形の面白さが印象に残る作品。



④染付 白抜蛸唐草文 蓋付碗

伊万里

江戸時代（18世紀） 通高 7.5 cm

白抜きの蛸唐草を全面に配した蓋付きの飯茶碗。濃い発色の染付の青色が、白抜きとした蛸唐草の文様を際立たせている。伊万里焼において本作のような蓋付碗が量産されるようになつたのは18世紀以降のことである。



⑤染付 蛸唐草松竹梅文 皿

伊万里

江戸時代（19世紀前半） 口径 33.5 cm

見込中央に環状の松竹梅文を描き、周囲を細かな蛸唐草で埋めた大皿。強く渦を巻き歯車状の葉を付けた蛸唐草は19世紀のもの。裏面にも大柄な唐草を描き、高台内「太明成化年製」銘を記す。その脇に釘彫りされた記号は所有者の家印と考えられる。

以上を含む、約70点を展示予定



展覧会概要

現代の食卓を飾るうつわにもしばしば描かれている唐草文様。古くは中東を起源とし、ナツメヤシやハスなどの植物文様が原形と言います。中国・朝鮮半島を経て日本へ伝来して以降、仏教装飾はもちろん、様々な工芸品にあらわされてきました。17世紀初頭に誕生した伊万里焼では初期から皿縁に装飾文様として用いるほか、主文様としてうつわ全体にあらわした作例もみられ、その意匠は花唐草・蛸唐草・みじん唐草へと展開していきました。

また、唐草は単なる装飾としての役割だけでなく、連續して繋がる様に“子孫繁栄”や“長寿”などのイメージが重なり、それ自体に吉祥の意味が付与されました。“永遠に続く幸福”を願う人々の思いを背景に、18世紀以降、伊万里焼の定番の文様として庶民の間に広く受け入れられていました。

今展では、17世紀初頭から19世紀前半にかけて製造された唐草文様の伊万里焼を約70点展示。江戸時代より人々の暮らしの中で愛されてきた古伊万里唐草の魅力に迫ります。



展示詳細

I 唐草のはじまり

唐草とは、植物の蔓を曲線であらわし、連続させた文様。その始まりは古代エジプトや紀元前のアッシリアにみられる、ナツメヤシやハスなどの植物文様と考えられています。やがて古代ギリシャで蔓草を繋いだ唐草文が完成し、地中海から広く東西へと伝播しました。中国では石窟寺院の装飾にはじまり、唐時代には工芸品の題材とされ、陶磁器においては、元時代以降の青花に盛んに描かれました。(右図)

日本へは5・6世紀頃に伝えられたと言い、莊厳な仏教装飾として花開いた後、染織など工芸品の意匠となりました。陶磁器では17世紀初頭に初の国産磁器として生まれた伊万里焼において、装飾文様のひとつとして取り入れられました。



＜参考作品＞

青花 花卉文 水注

景德鎮窯

明時代・永楽年間(1403-24)

高 36.1 cm

※今展には出展しません

II 古伊万里の唐草

唐草は伊万里焼の草創期から確認でき、その表現は時を経るにつれ変化をみせます。17世紀初頭の皿や瓶では副次的な使用が大半を占めますが、やがて主題として描いた作例も増え、17世紀中期には菊や牡丹などの花を中心に据えて周りを唐草で繋いだ“花唐草”が多くみられるようになります。この頃には中国より色絵技術が伝わり、唐草の表現に瑞々しい色彩が加わりました。絵付け技術が頂点を迎えた17世紀後半には、より密に蔓をめぐらせ、花や葉を柔らかな染付の青の濃淡であらわした、纖細で優美な花唐草が完成しました。

18世紀に入り、花唐草は伊万里焼の定番文様となります。以降、色絵や金彩の表現もあるものの、うつわを埋めつくす唐草の主役となったのは青1色の染付製品でした。18世紀後半には西欧への輸出事業が衰退し国内需要に向けた量産化が進む中で、花唐草から花が消え、19世紀には蔓を簡略化した“みじん唐草”へと大きく変化しました。



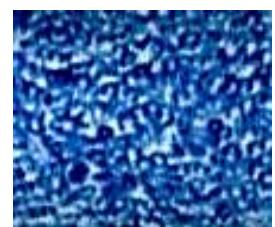
17世紀初頭



17世紀後半



18世紀後半



19世紀前半

III 永遠の蛸唐草

古伊万里唐草には花唐草の系統とは別の発展を遂げたものがあります。蔓に突起状の葉を加えたその文様は、蛸の足のようにみえることから近代に至り“蛸唐草”と呼ばれるようになりました。17世紀中期より萌芽がみられ、元禄年間（1688-1704）頃まで輪郭線の中を丁寧に塗って描かれていました。やがて18世紀には線描きであらわされるようになります。この頃には食器のほかに様々な磁器製の生活道具が生まれ、蛸唐草がそれらの複雑な器形を自在に埋めていきました。19世紀以降は単調な細線で渦を強く巻いた蛸唐草の製品が量産され、より幅広い層に普及していきました。

蛸唐草の軸となる太い蔓の渦巻きが力強く繰り返される様子は、観る者に植物のもつ生命力や永遠性を感じさせます。こうしたイメージが“子孫繁栄”や“長寿”、“永遠の幸福”など、いつの世も人々が抱き続ける願いと重なり、伊万里焼の定番文様としてこれほど長く人々に親しまれることに繋がったのでしょうか。



17世紀中期



17世紀末～18世紀初



19世紀

IV 暮らしのうつわ

18・19世紀には、それまで主な需要層である大名などの特権階級に加え、裕福になった町人たちが伊万里焼の消費者となります。江戸の大名屋敷跡からは唐草の皿が数十客の単位で大量に出土し、大人数が集う饗応の場で組皿として用いたと推察されます。また、19世紀の江戸の街に続々と開いた料理屋や屋台でも伊万里焼や瀬戸製の磁器などが大量に消費されたと考えられています。

皿・鉢・碗・猪口など、この時代の伊万里焼の多くに唐草が描かれたのは、消費者の好みに合致したのはもちろん、連続文様による構成が絵付けの上手下手を問わず誰しも描きやすい文様であったこと、器形に合わせた形でいかようにも描けること、といった量産に適した文様の利便性が影響したと考えられます。江戸後期、伊万里焼の普及により人々の暮らしのうつわとなった古伊万里唐草をご紹介致します。



染付 花唐草文 皿
伊万里 江戸時代（18世紀）
口径 20.5 cm



染付 蛸唐草松竹梅文 竹形猪口
伊万里 江戸時代（18世紀）
高 6.6 cm

※なお、概要の要約が必要な場合は以下の文章をご参照ください。

■ 29 word

江戸の暮らしで使われた古伊万里唐草のうつわ約 70 点を展示。

■ 148word

終わりなく連続する様に、永遠の幸福への願いが込められた唐草文様。大陸よりもたらされたその意匠は、仏教装飾はもちろん様々な工芸品にあらわされ、古伊万里では花唐草・蛸唐草・みじん唐草へと展開し、暮らしのうつわを彩りました。約 70 点の作品から人々に広く受け入れられた古伊万里唐草の魅力に迫ります。



展示解説

展示期間中、第 2 週・第 4 週の水曜日と土曜日に、当館学芸員による展示解説を行ないます。予約は不要です。入館券をお求めの上、ご自由にご参加ください。

■第 2・第 4 水曜 午後 2 時～ (7月 13・27 日、8月 10・24 日、9月 14 日)

■第 2・第 4 土曜 午前 11 時～ (7月 9・23 日、8月 13・27 日、9月 10 日)

※各回、約 40 分～50 分ほどの解説になります。

※団体でご来館のお客様への展示解説も承っております。電話 (03-3465-0070) による事前予約制。お気軽にご連絡くださいませ。



夏休み特別企画 やきもの展示解説 入門編



陶片に触れながら陶器と磁器の違いや伊万里焼の歴史などを学んだ後、「古伊万里唐草—暮らしのうつわ—展」をご案内致します。初心者の方もお楽しみいただける入門編の解説になります。予約不要。入館券をお求めの上、ご自由にご参加ください。

■8月 2 日 (火)～8月 7 日 (日)

毎日午後 2 時～ (所要時間約 60 分)

☆参加者には当館特製リーフレットプレゼント



戸栗美術館 概要

戸栗美術館は、創設者 戸栗亭が長年に渡り蒐集した陶磁器を中心とする美術品を永久的に保存し、広く公開することを目的として、1987年11月に、旧鍋島藩屋敷跡にあたる渋谷区松濤の地に開館しました。コレクションは伊万里、鍋島などの肥前磁器および、中国・朝鮮などの東洋陶磁が主体となっており、日本でも数少ない陶磁器専門の美術館として活動しています。



会場：戸栗美術館

開館時間：10:00～17:00(入館受付は16:30まで)

休館日：月曜日

※7月18日(月・祝)・9月19日(月・祝)は開館、

翌7月19日(火)・9月20日(火)は休館。

入館料：一般 1,000円/高大生 700円/小中生 400円 (団体20名様以上で200円割引)

交通：渋谷駅ハチ公口より徒歩15分／京王井の頭線 神泉駅北口より徒歩10分

※当館には駐車場・駐輪場はございません。

■Youtube 戸栗美術館チャンネル

<http://www.youtube.com/channel/UCGsnhei61hDkvDQlftWy9ZA>

■フェイスブック 開設

日本語・英語版をご用意し、随時展覧会・イベント情報をご案内しております。

■次回展示予定

2016年10月4日(火)～12月23日(金・祝)

戸栗コレクション 1984・1985

—revival—展



■展覧会に関するお問い合わせ

公益財団法人戸栗美術館
広報担当宛

〒150-0046 東京都渋谷区松濤1-11-3
TEL: 03-3465-0070 FAX: 03-3467-9813
URL: <http://www.toguri-museum.or.jp/>
E-mail: kouhou@toguri-museum.or.jp



アートサークルのご案内

陶磁器に親しみ、美術館をより楽しんでいただくために、会員制のアートサークルを設けております。1年間何回でもご入館いただける他、さまざまな特典もご用意しております。

年会費 ￥5,000（税込）／発行から1年間有効

※有効期限内のご更新は、4,500円です。

（期限を過ぎてのご更新は新規ご入会と同じく5,000円となります）

特典① 入会から1年間、何度でもご入館いただけます。

特典② ご入会時に戸栗美術館オリジナルグッズをプレゼント。

（はがき5枚、A5クリアファイルのどちらかをお選びいただけます）

特典③ 年末に当館オリジナルカレンダーをお送りいたします。

特典④ 展示ごとに陶磁器の専門家による特別展示解説にご参加いただけます。

開催日時は会報でお知らせします。

（所要時間約1時間、要予約・定員制・先着順）

特典⑤ 会員様を含めた3名以上の団体様は、学芸員による展示解説（ミニツアー）を受ける事ができます。（随時予約受付、所要時間約30分）

特典⑥ 各展示に1回月曜休館日に開催される特別講座にご参加いただけます。

開催日時は会報でお知らせします。

（参加費1500円～、所要時間約3時間半、要予約・定員制・先着順）

特典⑦ 企画展ごとに会報「戸栗美術館だより」、招待券2枚、展示ご案内チラシをお届けいたします。

特典⑧ ミュージアムグッズを価格の1割引きでご購入いただけます。

（一部除外品あり）